

マッカーサー、日本軍、オーストラリア ——マッカーサーのフィリッピン脱出とオーストラリアへの転進——

鈴木 英 夫

マッカーサーとフィリッピン、およびマッカーサーのフィリッピン脱出

拙稿『オーストラリアから見た日本：太平洋戦争勃発まで』⁽¹⁾において、筆者は 19 世紀初頭以来オーストラリアという国とその社会が、アジアをどのように感じてきたか、特に 20 世紀に入ってから日本という新興国に対しどのように対処してきたかを、軍事面に注意を払いつつ論じた。太平洋戦争は 1941 年 12 月 8 日、日本海軍が真珠湾を奇襲することによって開始される。本論文ではその『オーストラリアから見た日本：……』での議論を踏まえつつ、しばらくの間目を東南アジア、特にフィリッピンに転じることにしたい。フィリッピンに軍事顧問として駐在していたダグラス・マッカーサー将軍のことを見ていくことにする。

この時期のフィリッピンとマッカーサーについては、ウィリアム・マンチェスター (William Manchester) の “American Caesar”⁽²⁾、マッカーサー自身の『回想録』⁽³⁾、袖井林二郎『マッカーサーの二千年』⁽⁴⁾、マイケル・ノーマン&エリザベス・ノーマン『パターン死の行進』⁽⁵⁾、服部卓四郎『大東亜戦争全史』⁽⁶⁾ など、特にマンチェスターを参考にしたが、彼らの叙述をたどりながら 30 年代末-40 年代初頭のマッカーサーとフィリッピン、および東南アジアの状況をおさらいしておきたい。その理由は、この時期この地域における状況の推移が、オーストラリアの軍事、政治、社会に直接かつ決定的な影響を及ぼすことになったからである。

日本軍は 1941 年 12 月から 42 年中盤までの間に、東南アジアと太平洋諸島を破竹の勢いで制圧していく。香港のイギリス軍を簡単に撃破、マレー半島を制圧してシンガポールも占領、英連邦軍をマレー半島・シンガポールから追い出し、さらにビルマを制圧する。グアム島を占領、さらにオーストラリア軍が守備していたラバウルのあるニューブリテン島を奪取した。そしてフィリッピンのマッカーサーを破って同国からアメリカ軍を駆逐する。インドネシアではオランダと連合軍を屈服させる。その勢いでセイロンまで攻撃の手を伸ばしコロンボ、トリンコマリー空爆などによりイギリスの海軍艦船と航空兵力に甚大な被害を与えたのだった。1942 年の前半まで、日本軍の東南アジア、太平洋海域における電光石火の勢力拡大は、これを止めるものが無いかのように見えたのだ。それらの切迫したニュースを南太平洋のかなたで耳をそばだてて聞いていたオーストラリアの社会には、これら事態の展開が、まさに彼らが 18 世紀末から恐れていたアジア人の侵攻侵略の津波、日本軍のアジア・太平洋地域への拡散という具体的な形をとって、自分たちの海岸まで押し寄せようとしていると感じられたのである。特に日本軍が 42 年 1 月にはオーストラリアの植民地だったニュー・アイルランド島、ニュー・ブリテン島などに空爆を行い、すばやくこれらを占領し、早速ラバウルに南太平洋における一大航空基地を建設し始めたことは、現実の脅威が庭先までやってきたと受け取られたのであった。ラバウル攻略の際に日本軍とオーストラリ

ア陸軍は直接交戦、豪兵士の千数百人が日本軍に降伏した。それら一連の状況展開はまさに津波の襲来のような恐怖をオーストラリア人たちに感じさせたのだ。

まずフィリッピンとマッカーサーのことをおさらいしておこう。マッカーサーこそがオーストラリアにとっても、また日本に対しても、異なる文脈で決定的な意味をもつからである。19世紀末の米・スペイン戦争の後、フィリッピンはアメリカの支配下に置かれることになった。アメリカはフィリッピンの中心都市マニラに統治行政の長としての総督（Governor General）を置くようになり、軍事面のトップとしてはマニラ軍管区にフィリッピン方面軍司令官を置いた。ダグラス・マッカーサーの父親アーサー・マッカーサーもその軍トップを勤めている。ダグラス・マッカーサーが始めてフィリッピンに赴任したのは、ウェストポイント士官学校を卒業して工兵少尉に任官した1903年のことであつた⁽⁷⁾。これが一回目。次は1922年、ウェストポイント陸軍士官学校の校長を退いた後で、フィリッピン方面軍司令官に任命されマニラに赴任する（～1925年まで）。これが彼にとってフィリッピンと深くかかわる2回目となった。その後アメリカに帰国するが、アメリカ陸軍将官中에서도非常に目立った存在のマッカーサーは、1928年アムステルダムで開催されたオリンピックのアメリカ選手団団長をつとめている。同じく28年、マッカーサーは再びフィリッピン方面軍司令官となりマニラに戻る。これが彼にとって3回目のフィリッピンである。1930年8月、フーバー大統領のときにマニラから呼び戻されてアメリカ陸軍参謀総長に任命され、次のルーズベルト大統領の第一期途中の1934年後半までアメリカ陸軍トップの職をつとめた。

アメリカ議会は、1933年にタイディングス・

マグダフィ法（フィリッピン独立法）を成立させ、フィリッピンを1946年に独立させることを決定していた。まだ独立はしていなかったものの、フィリッピンはその準備段階としての自治政府的なフィリッピン・コモンウェルス（暫定政府）を作ることとなり、アメリカの承認のもとマヌエル・ケソンがその大統領となった。34年に陸軍参謀総長を退いたマッカーサーは、再びフィリッピンに赴くことになった。フィリッピン政府の軍事顧問となったのだ。彼にとってこれが4回目のマニラ行きである。マニラにおいて彼の副官となったのはドワイト・アイゼンハワー中佐だった。アイゼンハワーはマッカーサーが陸軍参謀総長だったときにも彼の副官（当時少佐）だったが、マニラでも再びマッカーサーに仕えることになったのである（中佐）。ワシントンで5年、フィリッピンで4年マッカーサーの副官だったことになる⁽⁸⁾。アイゼンハワーこそ、ヨーロッパ連合軍が1944年6月に敢行してドイツに対し決定的な大勝利をおさめた「ノルマンディー上陸作戦」の連合軍総司令官であり、後に34代アメリカ大統領となる人物である。

また、マニラに赴任するときにマッカーサーは母親のピンキーを伴っていた。ピンキーがマッカーサーに対して絶大な影響力を持った母親であったことは伝記や自叙伝に詳しい。マッカーサーの任地に同行したピンキーは、マニラ到着の直後に亡くなったのだ。マニラへの旅でもう一つ特記すべきことは、赴任地に向かう船上でマッカーサーがミス・ジーン・マリー・フェアクロスと会い親しくなったことである。彼らはマニラで結婚するが、ミセス・ジーン・マッカーサーはその後、将軍マッカーサーが乗り越えていく幾多の戦い、つまりフィリッピンでの対日本軍戦闘、パターン半島とコレヒドール要塞での抵抗、オーストラリアへの脱出、オーストラリアにおける南西太平洋地域総司令官の

任務、マニラ奪回、日本占領、朝鮮戦争、アメリカへの帰還、「老兵は死なず……」のスピーチの段階にいたるまで、常にマッカーサーのそばにいて彼を支えることになった。

マッカーサーが軍事顧問、現地の実質的な軍トップとして赴任したフィリッピンであるが、そのフィリッピンの防衛についてアメリカはどのように考え、どのような備えをしていたのだろうか？ 日本の軍事力を意識してアメリカ海軍が送り出した「白色大艦隊」のことは拙稿『オーストラリアから見た日本：太平洋戦争勃発まで』において触れた。アメリカは日露戦争以後日本の脅威を認識し始め、アジア・太平洋における日本の侵出とそれがアメリカのアジア、太平洋地域における利害を侵す可能性を検討していたのだ。具体的な対策が形を現すのは1920年代前半である。これをオレンジ作戦（War Plan Orange WPO）といった。

以下はしばらくマンチェスターの“American Caesar”をたどることになる。マッカーサー准将が1920年代前半マニラに着任した（2回目）とき、最初に与えられた任務の一つはマニラ湾の出口の一部をなすバターン半島を探查し、測量することだった⁽⁹⁾。ジャングルと山地からなるバターン半島の突端から海を隔てて3マイルのところにコレヒドール島がある。マッカーサーの報告を参考にしながら、アメリカ陸海軍上層部はWPOを作成した。その概略はManchester⁽¹⁰⁾や『マッカーサーと戦った日本軍』田中宏巳⁽¹¹⁾などが伝えるところであるが、筆者なりに解釈すれば、日本が東南アジアに進出するにあたってはフィリッピンがどうしても必要となる、したがって日本軍はフィリッピンを攻めるだろう、それを即座に撃退することはアメリカには出来ない、攻撃された場合、現地米軍はバターン半島に退却し、こことコレヒドール島に作る要塞において日本軍を6ヶ月に渡り防ぎ、海軍のアメリカ太平洋艦隊の到着ま

で持ちこたえるということであった。つまり守勢的、防衛的な作戦である。オレンジ作戦は何度か更新され、後に名前がレインボー計画と変わる（内容は本質的に同じ）が、マッカーサーはどのバージョンに対しても反対の意見を持っていたという。消極的、防衛的な基本姿勢に賛成できなかったし、アメリカ軍が現地に配置している兵力と装備から言って、オレンジ作戦というのは、結局のところフィリッピンを見捨てるということを意味しているのだと彼が解釈したからである⁽¹²⁾。4回目に軍事顧問としてマニラに戻ったマッカーサーは、オレンジ作戦の基本的想定を覆すべく懸命に努力した。フィリッピンの現地人部隊を編成、訓練し、駐フィリッピンのアメリカ軍を増強し、装備を整えれば日本軍の攻撃を撃退するに十分な兵力になる。そうなれば、始めからパターンに退いて戦うというオレンジ作戦の消極策とは全く異なる戦争計画が可能になるのだというわけである。マッカーサーは暫定自治政府のケソン大統領に熱心に説いた。日本軍の侵略に対しては、PTボート（patrol torpedo boat 哨戒魚雷艇）を組織して、250機の航空機を配し、アメリカのウェストポイント流の士官学校で訓練された930人の将校団と1万人の軍を創設、それを核としてさらに40万人の兵隊を徴兵し、40個師団を編成、これをもって半ゲリラ方式による徹底した消耗戦を挑む。そうすれば日本軍は50万人規模で攻めてきてもフィリッピンを屈服させるのに3年間と50億ドルの費用がかかるだろう。これだけの人員と時間と費用をかけて日本軍は攻めてこようとするだろうか、そうはできないだろう。……この考えに沿ってマッカーサーの副官アイゼンハワーとオードは2500万ドルの防衛予算案を作成した。アイゼンハワーは言う。我々にとって“最大の敵”は“金がない”ということだった。アイゼンハワー・オード案に対して、ケソン大統領とマッカーサーは800万ド

ルまで削減することを命じる。真珠湾攻撃までの時点で、予算規模はさらに減らされ100万ドルになってしまった⁽¹³⁾。ケソン大統領が議会に対して何よりも先に提案したのは防衛予算だったが、提案は35年12月21日には議会を通過したものの、徴兵された最初の2万人の兵隊がやっと訓練キャンプに入ってきたのは37年の早いころだった。しかも兵隊達が話す言葉は全く統一されておらず、お互いはっきりと異なる8つの言語と、あわせて87の方言からなっていた。下士官や部隊事務の2割は文盲だった⁽¹⁴⁾。これでは軍隊の態をなさない。アイゼンハワーが回顧するとおり、マッカーサーが思い描いたような十分な防衛力を創設するというのはとうてい実現不可能なことだった。

しかし、マッカーサーとアイゼンハワーは、フィリピンの防衛力構築に努力する一方で、日本は攻めてこないのではないかと判断していたという。理由は2つ。(1)もし日本がフィリピンを占領しようとすれば、日本の軍事力が中国へとフィリピンへの2つに分割されることになり、これは日本の軍事力を極端に弱めかねないし、(2)フィリピンに上陸する際には水陸両用作戦をやらなければならないが、これを日本がやれば、彼らは第一次世界大戦において英連邦軍がトルコのガリポリで苦しみぬいたのと同じ苦戦を強いられることになる。……だから日本軍は攻めてこないのではないかというわけである。(第一次世界大戦時、ダーダネルス海峡に面したトルコのガリポリ海岸線に上陸してトルコ国内に進撃しようとした英連邦軍は、海岸を臨んでより高い地点に陣取ったトルコ軍に狙い撃ちされ、結局ものすごい戦死者を出して撤退することになった。日露戦争のとき旅順を攻めた乃木軍の犠牲を思わせる戦いであった。この作戦にはオーストラリア軍が主力として参加、こだけで8,100人の戦死者を出した。ガリポリの戦いはオーストラリアにとっ

て忘れることのできない歴史的戦闘であり国民叙事詩的な経験である。たとえばオーストラリア戦争記念館ホームページ www.awm.gov.au/encyclopedia/gallipoli/fatalities を参照)

結局フィリピン現地人による強力な防衛軍を作る構想は満足な実を結ばなかった。41年の後半になるとさすがに軍備増強の動きは始まったものの、マッカーサーのもとには、1941年段階でアメリカ軍兵士とフィリピン・スカウト併せて2万2千人、フィリピン連邦軍8万人がいるだけだった。また海軍には巡洋艦3隻、駆逐艦13隻、潜水艦18隻、高速魚雷艇PTボートが6隻のみ⁽¹⁵⁾。空軍力も不十分だった。実際に日本航空隊の攻撃にさらされた朝のことを振り返ったマッカーサー自身の言葉を引用すると、「……日本陸軍機307機、海軍機444機、合計751機のすさまじい攻撃にさらされた。我々は七対三の割合で不利だった⁽¹⁶⁾。」ということは、マッカーサーの下にあった航空機は300機近くだったということになろう。マッカーサーのフィリピン駐留の空軍力や関連事項に関する叙述は、他の著者達の叙述と矛盾するところがいくつかあるようだが、「当時フィリピンにあった米航空部隊は手持ち機の多くが旧式のもので、装備は不十分、飛行機は不完全、修理設備は不備というほとんどおしるし程度の空軍力だった」という彼自身の文章⁽¹⁷⁾には、他の著者達も反対はしないようである。そして、日本軍は攻めてこないかもしれないというマッカーサーやアイゼンハワーの早いころの希望的な予想に反して、日本軍はフィリピン上陸作戦を敢行、本間雅晴中将が率いる第14軍主力をリンガエン湾に上陸させたのであった。

さてフィリピンにおけるアメリカの戦争準備は、上に述べたようにマッカーサーが希望したレベルをかなり下回る不十分なものではな

かった。他の東南アジア地域の対日防衛体制はどうだったのだろうか。香港、マレー半島、シンガポール、セイロンにはイギリス軍を中心とする英連邦軍が駐留していた。インドネシアのジャワ島にはオランダ軍が駐留していた。しかし、これらの軍も日本に対する防衛力として、十分というには程遠いものだった。39年9月に第二次世界大戦が始まり、連合国側は40年半ばドイツとの本格的な戦闘に突入したのであるが、既に『オーストラリアから見た日本：太平洋戦争勃発まで』で述べたとおり、フランスは早々と40年6月ドイツに降伏し、これに乗じた日本はベトナム北部への駐留をフランスに飲ませたのだった。39年の開戦時に中立宣言していたオランダも、宣言を無視したドイツ軍に占領され、オランダ王室と政府はロンドンに亡命していた。イギリスは40年8月からドイツ軍の空襲にさらされ、またこれも既に詳しく述べたとおり（『オーストラリアから見た日本：……』）、北アフリカ戦線でロンメル將軍下のドイツ軍との戦い、ギリシャ戦線での大敗北など、イギリスと英連邦軍はヨーロッパ、アフリカ、中東において大きな戦力の投入と消耗を余儀なくされていた。つまり、アジアにあって日本の武力侵攻に抗するはずのヨーロッパ諸国は、彼らがいかに努力しようとも、日本の攻撃に備えて十分な防衛力を備える状況になかったのだ。他の戦場においてドイツに対し生きるか死ぬかの戦いをしている最中だった。日本軍が東南アジアおよび南太平洋方面への作戦を展開し始めたとき、日本に対抗する側の勢力はそのような状態にあったのである。

アメリカのアジアにおける防衛体制についてさらに付け加えておくべき最重要事項がある。米・英の間で合意されていた Germany First 戦略と、それがアジア・太平洋の戦局に対して持った意味である。アメリカのルーズベルト政権は、真珠湾攻撃をきっかけに日本との太平洋戦

争に突入し、その4日後ドイツがアメリカに宣戦布告することによってヨーロッパ、北アメリカ、中東での戦闘に参戦していく。しかしそれらの戦端が開かれる前に、日本、ドイツ、イタリアとの戦争を前もって予測していたアメリカは、太平洋戦争勃発前からイギリスとの秘密の合同参謀会議などを通じて、世界戦争になった場合には Germany First “まずドイツを打ち破る”あるいは Europe First “まずヨーロッパにおいて勝利する”という基本戦略を決定していた⁽¹⁸⁾。既に述べたように、41年段階までドイツは圧倒的な優勢を保っているように見えた。ドイツがイギリスとソビエトの両方を破ったならば（それは大いにあり得ると考えられたのだ）、アメリカは圧倒的に強力になったドイツと（太平洋方面の日本とも）ひとりで戦わなければならない。そうさせないためにアメリカとイギリスとは最初にドイツをたたくことに力を結集するという方針である。この基本戦略がある限り、アジア・太平洋方面に対するアメリカ、イギリスの戦力配備は手薄になるということもやむを得ないことになる。マンチェスターは41年10月10日にアメリカ陸軍省作戦局が、太平洋の子午線の西（マンチェスターは east of the 180 meridian と書いているが多分 east ではなく west の誤り）に駐留する全ての米軍戦力の撤退を勧めることになったことに触れ、「こういうことになれば、フィリッピンを犠牲にするのみではなく、グアム、ウェーキ島をも諦めるということになっただろう。マニラ湾というアメリカ国旗の下にある西太平洋における最良の港湾基地、南シナ海を通して日本と東南アジアを結ぶ南北航路を扼する港をアメリカは諦めるということになっただろう」と記している⁽¹⁹⁾。話が前後してしまうのを危惧しつつ付け加えれば、イギリス首相チャーチルが、1941年12月後半、ワシントンでいわゆるアルカディア会議（Arcadia Conference）においてルーズベルト

と会談した際、ルーズベルトとスティムソン陸軍長官はチャーチルに対してフィリッピンはもう諦めている（lost cause）と打ち明けたのだった⁽²⁰⁾。しかし、このように対ドイツに力を集中し、その間日本に対しては手薄になるという基本戦略があったとはいえ、実際の状況は陸軍長官や陸軍省作戦局の戦略思想とは異なる展開を見せるようになる。現実には、米海軍はドイツ降伏のはるか以前に、「珊瑚海海戦」や特に「ミッドウェイ海戦」において日本の連合艦隊に強力な、決定的なダメージを与えることに成功したのだった⁽²¹⁾。なぜ Germany First 戦略と異なる展開となったのか、その大きな理由の一つは、真珠湾で日本海軍の奇襲によって自分たちの太平洋艦隊に大損害を与えられ、深くプライドを傷つけられたアメリカ海軍、アメリカ国民が、日本に対する復讐に燃えていたことだろう。ルーズベルトも彼の統合参謀本部も、日本を叩くタイミングを引き伸ばすことができなかったのだ。しかしそれでも大きな影響はあった。アメリカがフィリッピン防備を不十分なままに置き、結局はマッカーサーや（捕虜になって満州に送られた）ウェインライト少将を見捨てることになったのは事実である。

またイギリスのチャーチル首相が、オーストラリアのメンジス首相、次のカーティン首相の必死の要請を受けても、オーストラリアへの航空機その他の武器の供与を渋り続け、オーストラリア軍を北アフリカ、中東、イギリスに駐留させ続けようとしてオーストラリア防衛のために本国になかなか返そうとしなかったのも Germany First の基本戦略がその理由になっていた。

以上の基本戦略を確認した上で、話を少々前の41年7月に戻そう。7月26日、ルーズベルト大統領はアメリカ軍とフィリッピン軍を統合し、マニラのマッカーサーを少将として現役復

帰させ、米・比統合軍の司令官に任命、翌日には中將に昇格させた（12月22日に大将）。同時にアメリカ国内の日本人と中国の資産を凍結、日本船舶のパナマ運河通行を禁止、アメリカから日本向けに石油、鉄、ゴムの輸出禁止、イギリスとオランダにアメリカと同じ禁輸措置をとるように要請し両国はこれを受託した。これらを受けて、東条英機は日本軍のサイゴン駐留をフランスに強要してこれを飲ませ（ベトナム北部には既に進駐していた）、かつ100万人の予備役を招集した。天皇からベルリン大使館に発した電文はアメリカの暗号解読官によって解読され、「米大統領の措置はわが国にもはや忍び難い状況をもたらした」と述べていることが明らかとなった。ここに日米開戦は避けられないものとなったのである⁽²²⁾。しかし、既に触れたように、マッカーサーの下にあった兵力は不十分なままであり、41年7月末から12月7日までの間に増強された兵力はアメリカ軍正規兵6083名だけだったという⁽²³⁾。この段階におけるアメリカ政府、軍首脳の方針はフィリッピン防衛準備は決して全力を投入したものではなかったといわなければならない。9月になると、アメリカ政府はマッカーサーに次のような指令を出した。手許の業務をすべて措き、東南アジアに駐在するイギリス軍司令官、オランダ軍司令官と連携してフィリッピン、オーストラリア、シンガポール、ポートモースビー、ラバウル、ボルネオ、ジャワ、スマトラの統一的防衛網を整えよ⁽²⁴⁾。これは驚くほど広い海域の防衛をマッカーサーの手もとの兵力でカバーせよという命令だった。マッカーサーはこの時になって始めてレインボー計画 VI の内容を知らされたという⁽²⁵⁾。そして12月8日を迎えたのだ

12月8日の開戦の日、戦争がどのように始まったかは何万冊とある記録が伝えるところでありここに深入りはしない。当日およびそれ以後の展開の概略だけを述べておく。日本軍はこ

の日8日、ハワイ、マレー半島、フィリッピンを攻撃し、ベトナムからおよび海上からタイに進出した。9日から10日にかけて香港、グアム、ウェーキ島の英軍や米軍を攻め、これらをごく短期間に制圧し、マレー半島、シンガポールのイギリス軍も翌年2月には降伏に追い込んだ。インドネシアのオランダ軍を主力とする連合軍に対しては42年1月に攻撃開始、3月にはこれを降伏させた。また1月にはタイからさらに前進してビルマに進攻、5月までにビルマ全土を支配することになった。既に述べたように、1月には南太平洋のオーストラリア領ニューブリテン島ラバウルに攻撃を開始、2月の早い頃までにオーストラリアの守備隊を降伏させてここを完全に制圧した。ラバウルを強大な基地として、日本軍はニューギニアやオーストラリア本土を攻撃し始めるのである。4月にはマレー半島からセイロンに逃れていたイギリス海軍を空爆して大損害を与えた。これらのことが開戦から半年の間に起こったことだった。

特にマッカーサーとフィリッピンのことについてはもう少し詳しく述べる。12月8日（日曜日）午前3時40分、マニラのマッカーサーはワシントンからの長距離電話で真珠湾攻撃を知らされた。実はフィリッピンのアメリカ海軍司令官ハート提督は、それよりも40分早い午前3時、ホノルルのキンメル提督から緊急電文でこのニュースを知らされていた。しかしハートはマッカーサーにその報を伝えなかったという。アメリカの陸、海軍間の深刻な亀裂を示すエピソードである⁽²⁶⁾。マッカーサーは、あれほど防衛体制が強固な米軍軍港パールハーバーを攻撃したからには、日本軍部隊は手厳しい敗北を喫したに違いないと考え、その後しばらく日本軍は敗北したと思っていたという⁽²⁷⁾。午前5時30分、彼はワシントンの陸軍省からの電文で日米が交戦状態に入ったことを知らされる⁽²⁸⁾。こ

の時間から午後1時37分までの間、マッカーサーの司令部において誰と誰が何をして何をしなかったかということについて、正確に再現することは今ではほとんど不可能になっているらしい。いずれにせよこの8時間半（午前3時40分から計算すれば10時間）の間にマッカーサー自身、and/or マッカーサーの部下達がおかしてしまった大失敗は、アメリカにとってしばらくの間取り返しのつかない大損害をもたらす結果となった。つまり彼らのもとにあった空軍力は、日本軍の空襲を受けてあっという間にほぼ全滅したのである。フィリッピンにあったB-17爆撃機の全てとP-40戦闘機のほとんどを失ったのだ⁽²⁹⁾。これによってマッカーサーは、数日後に始まる日本の陸戦部隊のフィリッピン上陸に対しても、日本軍の補給線に対しても、空から攻撃を加える手段を完全に失ってしまった。マッカーサー、彼の参謀長サザランド、彼のもとで航空戦力を指揮するブレトン（Brereton）、およびその他の重要人物達の間の連絡がうまくいかず、この時間帯にそれぞれに信じられない判断の誤りをおかしたのである。彼らは日本の航空編隊がこちらに向かっていているという情報を受け取ったら即座に自分達の航空機を飛び立たせておくべきだったのだ。いかにマッカーサー自身“ホンのおしるし程度の空軍力”と自嘲していたにせよ、敵の攻撃から守る措置を講じるべきだったのだ。ブレトンは開戦前の段階で航空機の一部をオーストラリアに避難させていたが、これを除いたフィリッピンの航空兵力が日本軍のエジキになったのである。

何が起こったのか。ピカピカの三菱陸攻108機とゼロ戦84機からなる日本の航空隊が米軍の航空基地（複数）にやってきたとき⁽³⁰⁾、日本のパイロット達が発見したのは、地上で静止しているか、やっと離陸体勢に入ろうとしている米軍機だった。空中にいたのはほんの数機の

み。日本の攻撃機は地上に陳列されていた敵機を易々と掃射、爆撃していった。フィリッピンに2ヵ所しかなかったレーダー基地の1つも、破壊された。マッカーサーが航空戦力の主力を置くクラーク基地にはP-40が36機、B-17が17機あった。これらは1機を除き12時30分頃から1時間足らずのうちに全て失われたのだ。『パターン死の行進』によると、日本軍の戦闘機のパイロットがクラーク基地の上空から眼下に見たのは、「敵の爆撃機と戦闘機が60機ほど飛行場の滑走路沿いに整列していた……うずくまったカモのように。」「目標の飛行場で敵機が平時のように整列しているのを見つけた」日本軍パイロットは、自分たちの成功に驚き、幸運に「当惑していた。」「戦争が始まったことを敵は知らないかのようだった」⁽³¹⁾からである。これらがやられたのだ。少なくとも短期的には、これは戦略的なといえる大損失だった。その重大さゆえに、後々になってもマッカーサーも、サザランドも、ブレトンも、自分には責任は無い、他の人間が過ちをおかしたのだと主張した。結局誰の責任なのかを確定することは今もって出来ないようである。このことについては、Manchesterの“American Caesar” pp. 229-238が非常に参考になる。

アメリカが太平洋方面に展開していた空軍力は、真珠湾にあった海軍の艦船機とフィリッピンのマッカーサーの下で航空機がほとんどだった。たった一日の攻撃で、この両方の空軍力の大半が消えてしまったのである。（日本の空軍力と対等に戦える米航空戦力が再登場し始めるのは42年5月の珊瑚海海戦。）マッカーサーはワシントンに緊急援軍要請したものの、アメリカ海軍艦船はマッカーサーの戦場には来なかった。ルソン島周辺海域は日本海軍の封鎖するところとなり、これを海軍力によって突破してマッカーサーに戦争物資を届けることを、アメリカ海軍首脳、統合参謀本部が是認しなかった

のだ。もちろんこのことに関してマッカーサーは統合参謀本部と海軍に対して怒り心頭に達していた⁽³²⁾。

実は開戦前の段階でフィリッピンへの兵員、戦闘機、爆撃機、その他の物資輸送のため、ペンサコーラ輸送船団（Pensacola convoy）が、アメリカを出港しマニラに向かっていた。開戦の報によりペンサコーラ船団はオーストラリアのブリスベン港に方向転換する。ルーズベルト大統領はワシントンのアルカディア会議（12月22日-1月14日）において船団の行き先を変更してイギリスに送ろうとチャーチルに申し出たという。しかし、いかに“まずドイツを叩く”Germany First基本戦略とはいえ、アメリカ国民がフィリッピンとマッカーサーの戦いを息を呑んで見守っているときに、大統領が太平洋の状況を完全に無視してペンサコーラ船団をイギリスに向かわせることはできなかった⁽³³⁾。結局この船団は、太平洋に留まることとなったが、日本海軍の封鎖を突破することはやはりできず、22日にブリスベン港に到着、停泊したままとなり、ここで荷降ろしをすることになったのだった。（結局フィリッピンまで行ったのはペンサコーラ船団の中の2隻で、そのうちの1隻、コーストファーマー号が1万トンの物資を積んでマニラから600マイル離れたミンダナオに到着した。物資はさらに小さな船に移され、1000トン分だけがその時にはコレヒドール島のマリント洞窟に立て籠もっていたマッカーサーのもとに届けられたという⁽³⁴⁾。

さて航空機の大部分を失い、日本海軍に封鎖され、アメリカ海軍の援護も補給も受けられなくなったフィリッピンとマッカーサーである。日本陸軍のフィリッピン上陸活動は12月10日、ルソン島北部のアバリとビガンで始まった⁽³⁵⁾。本間雅晴中将を司令官とする日本の第14軍主力が本格的な上陸作戦を開始したのは12月22日である。場所はマニラ北方のリンガ

エン湾。24日にはマニラの南方の東海岸のラモン湾に別の大部隊が上陸した⁽³⁶⁾。これで第14軍の主力がフィリッピンに上陸。北方と南方からマニラのマッカーサーとケソン大統領を頂点とするフィリッピン政府を挟み撃ちにする攻撃が始まった。マッカーサー下の兵力中リンガエン湾で戦ったのはウェインライト少将が指揮する第一軍団、ラモン湾に向かったのはジョーンズ少将指揮下の第二軍団。両方ともその主力はフィリッピン人兵士だった。タガログ語の離せないアメリカ将校と、英語のよくわからないフィリッピン兵士がほとんどの軍隊が、身振り手振りで対話しながら日本軍を食い止めようとしていたのだ⁽³⁷⁾。ウェインライト達は本間中将の主力部隊と戦いながら徐々に後退して時間を稼ぎ、バターン半島を目指した。第二軍団や南部に展開していた諸部隊は、マニラを通して第一軍団より早くバターン半島に撤退していくという作戦を取った⁽³⁸⁾。バターン半島というジャングル山地を米・フィリッピン軍の根拠地として、日本軍をここに誘い込み、ここで持久戦を挑み、日本軍の消耗とアメリカからの援軍を待とうというわけである。これは結局レインボー VI 計画の線に沿った動きだった。オレンジ計画やレインボー計画に反対したマッカーサーであったが、十分な兵力を持たない彼には他にやりようがなかったのだ。本間の第14軍による挟撃・進行作戦をかわし、バターンまで退却して食い止める!!

マッカーサーの司令部をそれまでのようにマニラに置いてそこで戦うことは無理だった。レインボー計画通りバターンに兵力を撤退させ、彼の司令部をさらに後方に置くことが必要だった。クリスマスイブの24日夕刻、マッカーサー、妻のジーンと息子アーサーは、中国人メイドのアー・チュー（Ah Cheu）とともにマニラを脱出してコレヒドール島の要塞に入った。そこから指揮をとるためである。フィリッピン

大統領マヌエル・ケソンとその家族もマッカーサーと同行した。フィリッピン政府の一部がコレヒドールに移った。

同じ日、フィリッピンにいたアメリカ海軍艦艇は、砲艦3隻、PTボート6隻、潜水艦を残して他の全てがフィリッピンを離れ、インドネシアのジャワに向かうことになった。ジャワでオランダ軍と合流して日本と戦うためである。また、航空戦力を率いていたブレトンもフィリッピンを離れオーストラリアに向かった⁽³⁹⁾。そこに退却して他日を期すことになった。

ジョーンズの第二軍団もウェインライトの第一軍団も、きわめて不利な条件の中でマッカーサーの撤退作戦を何とかやり遂げた。自分たちの兵力を粉砕されることなく、バターン半島まで到達することができたのである。12月31日までには米比軍の大半はバターン半島に到着した。本間中将の第14軍主力がマニラに入ったのが42年1月2日⁽⁴⁰⁾。1月6日、ウェインライト指揮下の部隊がラヤック橋を爆破して米比軍の撤退が完了した。

マッカーサーはマニラを撤退するに当たり、この都市を非武装宣言（自分たちはここに立て籠もって戦わないと宣言）して日本軍の攻撃による破壊から守ろうとした。日本軍はこれをほぼ無抵抗で占領し、マニラに残っていたフィリッピンの要人たちの中から独立運動の闘士として名声の高いエミリオ・アギナルド將軍を見つけ出し、彼を傀儡首班として日本軍政下のフィリッピン政府をでっち上げた。以後アギナルドは日本軍の圧力の下フィリッピン人、特にバターン半島、コレヒドールにいるフィリッピン人達に対して、日本軍はフィリッピンの独立を約束していること、日本軍に降伏するよう呼びかけていくのである⁽⁴¹⁾。

バターンとコレヒドールに立て籠もる米比軍と、マニラを支配下においてマッカーサーの軍

隊を攻撃する第14軍との攻防は4月中旬ころまで激しく続いた。それ以後、米比軍の主力部隊が次々に白旗を掲げて降伏してきた。バターン半島における戦闘は、米比軍にとってはもちろん、第14軍にとっても大きな苦しみと犠牲を伴うものだった。米比軍には補給というものがほとんどなかった。武器、食料、医薬品はたちまち底をついた。第一、第二軍がバターン半島に撤退したとき、兵員は米兵が1万5千人、フィリピン兵が6万5千人、計8万人規模だった。しかしそれだけではなく、2万5千人の民間人避難民が彼らと行動をとともにしていた⁽⁴²⁾。バターン半島はジャングルに覆われた山地である。米比軍も日本軍もマラリア、デング熱、赤痢などにバタバタと倒れていった。第14軍の場合、「リングエン湾上陸以来……死者3320人、負傷者5350人を出し、1万5500人がマラリアやデング熱、脚気や赤痢で戦えなくなっていた。つまり、本間は指揮下の兵力のおよそ半分、2万4000人以上を失っていた」のである⁽⁴³⁾。物資輸送を受けていた日本の第14軍ですらこうだった。まして外部から援助の手がほとんど届かない米比軍においては、状況ははるかに厳しかった。彼らは塹壕の中で耐えた。彼らには（日本軍とは異なり）食料が圧倒的に不足していたのだ。陸上でも攻められ、空からも爆撃された。1942年始めの3ヶ月の段階で、アメリカ・フィリピン軍は一年後に別の日本軍がニューギニアの戦いで陥る絶望的な状況と同じような惨状に陥っていたのである。

コレヒドールのマリント洞窟を司令部としたマッカーサーにとって、これはとうてい勝つことのできない戦いだった。そしてこのことはワシントンのルーズベルト大統領にも、陸軍参謀総長のマーシャルにもわかっていた。しかし、マーシャルとアイゼンハワーが起草し、ルーズベルトが署名した電文の中で、コレヒドールのマッカーサーに対し次のような命令を伝える。

「日本の侵略に抵抗できる可能性が残されている間は、抵抗を続けること。……日本軍の侵略に最後の最後まで抵抗することの任務と必要性とは、フィリッピンにおいて我々が直面している他のあらゆる義務を超える重要性を持つ。

（The duty and the necessity of resisting Japanese aggression to the last transcend any other obligation now facing us in the Philippines）⁽⁴⁴⁾」これはマッカーサーと彼の指揮下の軍隊に対して玉砕するまで戦えと命令するのと同じことだった。妻子とともにコレヒドールで抵抗を続けるマッカーサーは死を覚悟したことだろう。彼と彼の将兵にとって絶望的な戦いが続いた。

しかし結局ルーズベルト、マーシャルは上の命令をくつがえす決断をすることになる。マッカーサーにフィリッピン脱出を命じたのだ。指揮下の軍隊を残して、マッカーサー大将（12月22日昇格）がフィリッピンからオーストラリアに向かうことを命じたのである。なぜ最初の命令がくつがえされて、オーストラリアに行けということになったのだろうか。アメリカ国内で、マッカーサーを死なすな！ マッカーサーを救え！ という声が非常に大きくなったことに加え⁽⁴⁵⁾、ルーズベルト大統領もマーシャル参謀総長も、マッカーサーというアメリカが誇る（第一次大戦のときからの）軍人英雄を失うことの意味を考え直したのである。そしてオーストラリアという要因とオーストラリアとチャーチル英首相との関係だった（すぐ後に述べる）。

既に述べたように、ウェーキ、グアム、香港、マレー半島は瞬く間におち、ラバウルも陥落した。2月初めになると日本軍はインドネシアに上陸を開始していた。この中にあって、頑強に持ちこたえていた（ように見えた）のはマッカーサーが指揮をとるフィリッピンだけだった。アメリカの新聞やラジオ報道は、マッカーサー軍

の勇敢な戦いをアメリカ国民に伝えていた。2月から3月にかけて、アメリカ国民にとってマッカーサーは、太平洋方面における唯一の明るい希望の星だったのだ。彼を見殺しにした場合、国民の失望と怒りは大変なものになるだろう。それは国民の戦意に重大な影響を与えるだろう。彼の死は、日本の軍国主義者に与える最高の宣伝材料になるだろう。しかもマッカーサーは、アメリカの並み居る将軍達の中でも最高レベルのアジア太平洋方面に関する経験と知識を持っている。いかに Germany First 戦略があるとはいえ、彼を見殺しにしていけるか？確かに今は援軍を送る状況にない、しかし少なくともマッカーサーを脱出させることが必要ではないだろうか。パターンやコレヒドール海域の状態からいって、マッカーサーが無事に脱出できるという保証はない。しかし、やってみる価値はある。

ルーズベルトとマーシャルが、最後の最後まで戦えという命令の線から、このように決断を翻すまでには大変な葛藤があったと思われるが、マンチェスターによればルーズベルトの背中をさらに一押ししたのはオーストラリアという要因とオーストラリアとチャーチルとの関係だったという。これは以後の話の展開にとって重要なことなので、マンチェスターに依拠しながら少々回り道をしながらも見ていくことにする。マーシャル陸軍参謀総長は、以前マッカーサーの副官をつとめ、フィリッピンの最近の情勢に詳しく、今はアメリカに戻ってきていたアイゼンハワーを開戦直後の12月中旬の時点で呼び出し、フィリッピンをどうすべきか話し合った。アイゼンハワー准将は、アメリカの反撃の基地としてオーストラリアを増強する必要があることを述べ、マーシャルとアイゼンハワーはこの点で意見が一致した⁽⁴⁶⁾。既述のペンサコーラ護送船団をマニラではなくブリスベンに向かわせるようにしたのもマーシャルとア

イゼンハワーの意見から出たものであり、またマッカーサーに対して最後の最後まで戦えとの大統領命の草案を書いたのも、既に述べたようにマーシャルとアイゼンハワーだった。実はアメリカ人たちはオーストラリアという国を良く理解していたわけではない。あまり深くは知らないオーストラリアという国に、連合軍側の軍備増強活動を監督するためジョージ・ブレット中将とパット・ハーリーニュージーランド駐在米大使が派遣され、アメリカ政府および軍と、オーストラリアのカーティン政権および豪軍参謀部との接触が急速に本格化していく。オーストラリア側がもろ手を挙げてこの接触を歓迎したのは言うまでもない。オーストラリアは、日本軍の南方進撃を心底からの恐怖心を持って見つめていたのは既に何度も触れたとおりである。

42年初め、オーストラリアにとって虎の子の精鋭4個師団は全て国外の戦線で戦っていた。第6、第7、9師団は北アフリカと中東におり、第8師団は兵力をマレー半島、シンガポール、ラバウルなどに割り振っていた。国内には小規模な将校団と、年端も行かない若い民兵や年齢のいった民兵、まだまだ訓練中の兵隊ばかりが残っているだけだった。カーティン首相やオーストラリア国民全体にとって、オーストラリア危急存亡の今、精鋭部隊が国内にいないということは耐え難いことだった。第8師団はアジア・太平洋に配置され、いわばオーストラリア防衛の最前線で戦っているものの、他の3個師団はオーストラリアからはるかに遠いところでドイツ・イタリアを相手にしていた。カーティン首相は、太平洋戦争勃発の前の段階からチャーチルに対して「我々の精鋭部隊を本国に帰還させてくれ、我々の安全が日本に脅かされているのだ」と訴えていた。当然のことながら12月8日以降、この訴えはますます切羽詰ったものになっていった。しかし、ヨーロッパを第

一の優先戦場としているイギリスのチャーチルやアメリカのルーズベルトにとって、カーティン豪首相やオーストラリア国民の要求がどれほどともなものであったにしても、それをおいそれと呑むことは難しかったのである。北アフリカ・中東戦線は地中海の支配権をめぐる戦いであり、ヨーロッパの戦局を左右すると考えられていた。したがって、チャーチルとルーズベルトにとって、この北アフリカ・中東戦線において英連邦軍中最強兵力の一つとされているオーストラリア軍、特にオーストラリア第9師団を手放すことは、連合国側の兵力を危険なまでに弱体化してしまうことを意味したのだ。チャーチルは、オーストラリアは緊急な危機にさらされているわけではないとカーティンに対して反論し、豪軍の本国帰還を必死で引き伸ばそうとした。ルーズベルトもそれに同調したのであった。もちろんカーティン首相は猛烈に反発した。結局、次のような妥協が成立する。アメリカが自らの兵力をオーストラリアに派遣して南太平洋とオーストラリアでの対日防衛力、攻撃力を増強する。ギリシャ戦線やクレタ島で深手を負っているオーストラリアの第6師団と第7師団はオーストラリアに帰還させてアメリカ軍と協力するが、トブルーク（現リビア）の第9師団は北アフリカに留まり、英連邦軍の一部としてロンメル軍との再度の対決に備える。

（実はこのような妥協がいざ実行に移された直後、インド洋を南下して本国に向かう第6、第7師団の行き先をチャーチルは豪政府と豪軍首脳に断らずに勝手に変更して、第6師団をセイロンに向かわせてそこで下船させた。また第7師団をビルマに向かわせようとする。チャーチルの勝手な命令はカーティン政権を心底から怒らせてしまうことになった。これは後ほど述べることにする。）

マーシャル陸軍参謀総長や戦争計画部次長のアイゼンハワー准将が現地監督のために送った

2名のうちの一人、駐ニュージーランドアメリカ大使は、「現在のオーストラリアの防衛体制では」敵の攻撃を受けた場合、オーストラリアは「ひとたまりもない」と報告していた⁽⁴⁷⁾。いかに Germany First とはいえ、オーストラリアが日本のおちるようなことがあったなら、それを逆転するのは容易なことではない。ルーズベルト大統領やマーシャル参謀総長が到達した考えは、このオーストラリアにマッカーサーを脱出させ、マッカーサーに米・豪連合軍の指揮をとらせるということだった。玉碎まで戦わせるのではなく、転進して新たな戦線を引受けさせる。これが運よく成功すれば、オーストラリアの不安を鎮めることになり、マッカーサーを死なすな!! というアメリカの世論にある程度応えることになり、北アフリカにおける英連邦軍の弱体化を避けることもできる。つまりマッカーサーに対するフィリッピン脱出命令は、幾つかの問題を同時に解くための答えだったのだ。逆に言えば、ここでマッカーサーが脱出に失敗すれば、戦局を左右する幾つかの重大な方程式は解けなくなるということでもあった。結局マッカーサーは脱出に成功する。そしてオーストラリア第9師団は、北アフリカ・中東戦線の天王山となったエルアラメイン（エジプト）の戦いで、英連邦軍がロンメル軍を敗走させるにあたりきわめて重要な役割を果たすことになった。後に述べるとおり、オーストラリアに渡ったマッカーサーはブリスベンに司令部を構え、42年後半から太平洋の日本軍を追い詰めていく。つまり、ルーズベルトとマーシャル、チャーチルたちは、乾坤一擲の賭けに勝ったのだ。しかし、マッカーサーのフィリッピン脱出は、まさに薄氷を踏むような危うい状況の下で決行されたものだった。将軍マッカーサーは、戦後日本の徹底的な改造に最大の影響を持った人物である。42年の時点でフィリッピン脱出に失敗して戦死していたら、戦後日本の

あり方も大きく変わっていたことであろう。

パターン半島での戦局が米・比軍にとって日に日に悪くなっていた2月の第3週、アメリカ政府は、コレヒドール要塞にマッカーサーたちとともに撤退していたケソン・フィリッピン大統領とその家族を、潜水艦を派遣してコレヒドールから脱出させた。（その後ケソンはまだ日本軍に占領されていない島々を移動することになり、後にオーストラリアへ、次にアメリカに落ち着くことになる。彼はアメリカで持病の結核で生涯を閉じることになる。フィリッピンに戻ることは叶わなかった。）2月23日、ルーズベルト大統領、スティムソン陸軍長官、マーシャル陸軍統合参謀長の連名による電報がマッカーサーのもとに届いた。アメリカ政府中枢からの命令である。マッカーサーはコレヒドールを出てミンダナオ島に向かい、そこからさらにオーストラリアのメルボルンに一週間以内に到着し、合衆国軍の指揮をとること⁽⁴⁸⁾。この命令に従うには、マッカーサーにとって2つの難しい問題があった。一つは日本軍の攻撃にさらされ、武器弾薬、食料も決定的に不足しているパターン半島の自分の軍隊を見捨ててオーストラリアに行くということの心理的な抵抗である。しかも自分の軍隊だけでなく、マニラを始め日本軍の占領下で苦しんでいるに違いないフィリッピンの人々（彼らもアメリカの一部なのだ）も見捨てることになる。もう一つは、制海権、制空権を日本に握られた状況の中で、コレヒドールを抜け出してミンダナオまで辿り着けるかという懸念である。

マッカーサーは幕僚達と会議を重ねた。彼と彼の幕僚達は、クリスマスイブ以降に届いたルーズベルトやマーシャルからの数々の電報を検討したうえで、アメリカ政府がオーストラリアに大きな兵力を集結しつつあり、マッカーサーはこの兵力を率いてフィリッピンにすぐに

戻ってくる事が出来るのではないかという印象を持つにいたった。実際、ルーズベルトやマーシャルの電報は、アメリカ軍が救援に駆けつける、あるいは駆けつけるところであると思わせるような文章があった⁽⁴⁹⁾。マッカーサーと彼の幕僚達の意見は、アメリカの兵力がオーストラリアに集結している、あるいは集結しつつあるならば、マッカーサーは危険を冒してでもできるだけ早くオーストラリアに向かい、できるだけ早くフィリッピンに援軍をつれて戻ってくるべきだという方向に固まっていた。マッカーサーはオーストラリアに向かい、彼の留守中パターン半島での戦いの指揮はウェインライトがとる。（実はマーシャル陸軍参謀総長は、マッカーサーには知らせずにウェインライトを三ツ星の中将に昇格させることを決めていた。マッカーサーの脱出後、ウェインライトが在フィリッピン軍の全権を持つことになる。つまり、ウェインライトはマッカーサーの許可を得ること無しに降伏することを含む全権限を与えられたということになったのである。）パターンのウェインライトたちは通常の3/8の食料配給で戦っていた。やせ細った兵隊達になっていたのだ⁽⁵⁰⁾。

コレヒドールを抜け出す方法に関しては、はじめ潜水艦での脱出が検討されたが、適切なタイミングでコレヒドールに回航できる潜水艦がないという事情から、PTボートを使うことになった。マッカーサーはワシントンに打電して、コレヒドール脱出のタイミングについては自分の判断に委ねてもらいたいと伝える。ワシントンはこれを許可した。脱出の日取りは3月11日と決まった。マッカーサーの手もとにあったPTボートは4隻に減っていた。PTボートは確かに高速ボートとされる魚雷艇である。4050馬力のエンジンが搭載され、最高コンディションの時には45ノットのスピードが出るはずだった。しかし現実には、マッカーサー

の下 PT ボートは新しい部品の補給もなく、
 廃船からの部品をかき集めて動いている老朽船
 だった。エンジンは通常の寿命の4倍の間酷
 使されていた。実際に出せる速度は23ノット。
 敵の軍艦の最高速度は35ノットだった⁽⁵¹⁾。ワ
 シントンからの命令ではマッカーサーのみが脱
 出することになっていた。次に陸軍省からの命
 令で、彼の家族も一緒に脱出することとなった。
 しかし、マッカーサーはこれらの命令を無視し
 て、自分と家族のほかに陸軍将校13人、海軍将
 校2人、技師の陸軍2等軍曹1人、それに息子
 付の女中アー・チューを乗船させた。4隻の
 PT 魚雷艇に乗った一行は3月11日の夕刻、コ
 レヒドールを出発し約1000キロ離れたミンダ
 ナオを目指した。この航海の詳細には触れな
 い。“American Caesar”や『マッカーサー回想
 録』に詳しい。奇跡的に日本の軍艦にも航空機
 にも発見されずに4隻ともほとんど無傷で3月
 13日にミンダナオにたどり着き、そこに4日滞
 在したあと、一行はミンダナオの飛行場から3
 月17日にオーストラリアのダーウィンに到着
 した。ダーウィンからオーストラリアのど真ん
 中のアリス・スプリングスへ飛行機で移動、ア
 リス・スプリングスから南オーストラリア州の
 州都アデレードに特別列車で向かった。マッ
 カーサーの到着を知らされたオーストラリア国
 民達は、アリス・スプリングスから移動するマッ
 カーサーの様子を、ラジオと新聞を通じて毎時
 間ごとに知らされたのだった。アメリカの英雄
 が我々の国にやってきたという熱狂だった。
 マッカーサーの「あの演説」は、このときの列
 車の中で練られた草稿に基づいたものであった
 という。アデレードに到着したマッカーサー
 は、駅前に集まった新聞記者たちを前にして宣
 言する。“The President of the United States
 ordered me to break through the Japanese
 lines..... for the purpose, as I understand it, of
 organizing the American offensive against

Japan, the primary objective of which is the
 relief of the Philippines. I came through and I
 SHALL RETURN.”⁽⁵²⁾「合衆国大統領は私に対
 して日本の包囲網を突破することを命令された
 ……その目的は、フィリッピンを第一の
 目標とするアメリカ軍による日本への反撃を私
 の手によって組織することであると私は理解し
 ている。私は包囲網を突破してきた。そして私
 は帰るであろう。」この時点でマッカーサーは、
 オーストラリアには自分の到着を待っている
 米・豪連合軍がいると思い込んでいたのだ。
 ルーズベルトやマーシャルからの電文がそうで
 あることを示唆していると彼は理解していた。
 その軍隊を引き連れて I SHALL RETURN. 「私
 は(フィリッピンに)帰るであろう。」彼はパター
 ン半島で苦しい戦いの指揮を取っているジョナ
 サン・ウェインライトに約束してきたのだ⁽⁵³⁾。

コレヒドールでの別れするとき、マッカーサー
 は痩せ細ったウェインライトに言った。「ジョ
 ナサン、君に私の立場を率直に理解しておいて
 もらいたい。大統領の度重なる命令によって、
 私はオーストラリアに行くことになった。私は
 大統領の命令に何度も抗議したが聞いてはもら
 えなかった。私には、命令に従うか、従わずに
 陸軍そのものから身を引くかの道しかなくなっ
 てしまったのだ。君の指揮下にある全ての兵員
 が、このことを理解してくれるように話してく
 れ。……もし包囲網を突破してオーストラリア
 に到着することができたら、私は出来るだけ早
 くフィリッピンに戻ってくる。このことは君も
 知っているとおりで。それまでここを持ちこた
 えるのだ。」

注

- (1) 鈴木英夫『オーストラリアから見た日本：太平洋
 戦争勃発まで』名城論叢第13巻第4号2013年3月
- (2) William Manchester “American Caesar: Doug-
 las MacArthur 1880-1964”, Dell 1979.

- (3) ダグラス・マッカーサー『マッカーサー回想録 上・下』津島一夫訳 朝日新聞社 昭和39年
- (4) 袖井林二郎『マッカーサーの二千年』中央公論社 1974年
- (5) マイケル・ノーマン&エリザベス・ノーマン『バターン 死の行進』河出書房新社 2011年
- (6) 服部卓四郎『大東亜戦争全史』原書房 1965年
- (7) Manchester 前掲 p. 76
- (8) Manchester 前掲 p. 183
- (9) Manchester 前掲 p. 145
- (10) Manchester 前掲 p. 145
- (11) 田中宏巳『マッカーサーと戦った日本軍：ニューギニア戦の記録』ゆまに書房 p. 40
- (12) Manchester 前掲 p. 145
- (13) Manchester 前掲 p. 184
- (14) Manchester 前掲 p. 185
- (15) Manchester 前掲 pp. 212-13
- (16) 『マッカーサー回想録上』 p. 190
- (17) 『回想録』 p. 192
- (18) Manchester 前掲 p. 206
- (19) Manchester 前掲 p. 206
- (20) Manchester 前掲 p. 274
- (21) 「珊瑚海の日戦」については『太平洋戦争海戦全史』新人物往来社 1994年、「ミッドウェイ海戦」は森史朗『ミッドウェイ海戦 第一部、第二部』新潮選書などを参照
- (22) Manchester 前掲 p. 210
- (23) Manchester 前掲 p. 213
- (24) Manchester 前掲 p. 215
- (25) Manchester 前掲 p. 215
- (26) Manchester 前掲 p. 229
- (27) 『マッカーサー回想録 上』 pp. 189-90。
- (28) Manchester 前掲 p. 232
- (29) Manchester 前掲 p. 238
- (30) Manchester 前掲 p. 237
- (31) 『バターン 死の行進』 前掲 p. 49
- (32) 『マッカーサー回想録 上』 pp 193-194 および Manchester 前掲 p. 239
- (33) Manchester 前掲 p. 240
- (34) Manchester 前掲 p. 277
- (35) 『マッカーサー回想録 上』 p. 197
- (36) 『マッカーサー回想録 上』 p. 199
- (37) Manchester 前掲 p. 245
- (38) 『マッカーサー回想録 上』 p. 200
- (39) Manchester 前掲 p. 251
- (40) 『バターン 死の行進』 前掲 pp. 99-100
- (41) Manchester 前掲 p. 281
- (42) Manchester 前掲 p. 248
- (43) 『バターン 死の行進』 前掲 p. 160
- (44) Manchester 前掲 p. 283
- (45) Manchester 前掲 p. 286
- (46) Manchester 前掲 p. 276
- (47) Manchester 前掲 p. 279
- (48) Manchester 前掲 p. 289
- (49) Manchester 前掲 p. 290
- (50) Manchester 前掲 p. 294
- (51) Manchester 前掲 p. 296
- (52) Manchester 前掲 p. 311
- (53) Manchester 前掲 p. 293